

『般若心経』は、二百六十二文字の経典です。般若心経をお唱えされたり、写経をされた方は、お経の中に「無」や「不」そして「空」という言葉が繰り返して出てくることに気付かれることでしょう。その三つの文字だけで、実に三十七回も登場します。

『般若心経』は、観自在菩薩つまり観音さまが、お釈迦さまの弟子である舍利弗に、ものごとの成り立ちを説明する五つの要素（五蘊）はすべて「空」であると深く理解し見極めることによって、仏さまの智慧を実践したと、示すところから始まります。

その中で、有名な言葉「色即是空」が出てまいります。「色」は人間の身体や物事など形あるものといった意味で、「色即是空」とは、形あるものは独立して存在しているのではなく、「空」である、つまり「縁起」によって成り立っているという意味です。

「空」には、実体がないという意味があり、「色即是空」は、自分を含むこの世界はさまざまな縁によって成り立っていることを示しているのです。

そして続く「空即是色」は、さまざまな縁によって成り立ち、さらに多くの縁によって常に変化しているものが私たち人間の身体や物事など形あるものであり、この世界である、といった意味合いになります。

五蘊、つまり、ものごとの成り立ちを説明する五つの要素がすべて「空」ですので、物質的な人間の身体や物事の形だけでなく、私たちが世界を感じ、行動したり、思いを巡らし自覚する、心の動きもすべて「空」であり、さまざまな縁によって成り立っており、そしてそれは常に変化をするものである、ということになります。

私たちは、周囲の人や自分自身などに対し、たくさんの「決めつけ」をしています。「あの人は、ああいう人間だから・・・」「私はこういう人間だから・・・」というように、勝手に決めつけてしまいます。しかし、もともと変化をするものに対して、変化しないと決めつけ思い込みをすると、現実と合わなくなってしまいます。

現実と合わないことに対して、私たちは「こんなはずではなかった」、「あんな人だと思わなかった」と、落ち込んだり悩んだり、悲しくなったりします。

しかしながら、観音さまがすべては「^{くう}空」であると見極められたように、私たちが、決めつけをせずに相手があるがままに見ることができれば、相手に対しても自分に対しても、互いの関わりとそれがもたらす変化に信頼を寄せ、理解を深めていくことができることでしょう。

— 終 —